

侍

遠藤周作



侍

遠藤周作

新潮社版



侍 (さむらい)

- 著者 ^{えん どうしゆうさく} 遠藤周作 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 大日本印刷株式会社 ●製本所
新宿加藤製本 ●発行所 株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71 振替 東京4-808
電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411
●1980年4月15日印刷 ●1980年4月20日発行
定価1600円

© Shūsaku Endō 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

侍

第一章

雪が降った。

夕暮、雲の割れ目からうす陽を石ころだらけの川原に注いでいた空が暗くなると、突然、静かになった。雪が二片、三片、舞ってきた。

雪は木を切っている侍と下男たちの野良着をかすめ、はかない命を訴えるように彼らの顔や手にふれては消えた。しかし人間たちが黙々と鉋を動かしていると、もう無視するように周りを駆けまわりはじめた。雪とまじりあつて夕靄がひろがり、視界は一面に灰色となった。

やがて侍と下男たちは仕事をやめて木の束を背負った。間もなく訪れる冬に備えて薪をつくるのである。蟻のように一列になり、川原にそつて谷戸に戻る彼らの額にも雪がふれた。

枯れた丘陵にかこまれた谷戸の奥に三つの村がある。村のいずれの家も丘を背に、前を畠にしているが、それは見知らぬ者が谷戸に入ってきた時、家から窺うことができるためである。押しつぶされたように並んだ藁ぶきの家は、天井に竹で編んだ實の子を張り、そこに薪や茅を干している。家畜小屋のように臭く、暗い。

侍は三つの村のことを知りつくしていた。父の代に殿からこの村とこの土地とを給地として与えられたからである。今は総領となった彼は公役の命令がくれば百姓たちの何人かを集め、万が

一、戦がはじまれば供をつれて寄親の石田さまの館まで駆けつけねばならぬ。

彼の家形は百姓たちの住む家よりはまだ良かったが、それでも藁ぶきの建物を幾つか集めたものにすぎぬ。百姓の家とちがうのは、幾つかの納屋や大きな馬小屋があり、周囲に土塁をめぐらしていることである。土塁をめぐらしても、もちろん家形は戦うための場所ではなかった。谷戸の北方の山に、むかし、この土地を支配して殿に滅ぼされた地侍の砦の跡があったが、日本中の戦が終り、殿が陸奥一の大名となられた今は、そんな備えも侍の一族には要らなくなった。その上、ここでは身分の上下はあっても、侍も畠で働き、下男たちと山で炭を焼く。彼の妻も女たちと牛馬の世話をする。三つの村から殿におさめる年貢は惣高、六十五貫、そのうち田からは六十貫、畠からは五貫出さねばならない。

雪は時折、吹雪いた。侍と下男たちのつけた足跡が長い道に点々と染みをつけた。誰もが無駄口もたたかず、温和い牛のように歩いた。二本杉とよばれる小さな木橋まで来た時、侍は自分たちと同じように髪を雪で白くそめた与蔵が野仏のように立っているのを見た。

「分家さまのお出でなりました」

侍はうなずくと肩から木の束をおろして与蔵の足もとにおいた。この土地の百姓と同じように彼の顔も、眼がくぼみ、頬骨がとび出て、土の臭いがした。百姓と同じように彼も口数が少なく、感情を外に出すことが少なかった。一族の総領であったが、彼は分家さまとよばれるこの年とった叔父が来るとやはり気が重くなる。父が死んだあと彼が長谷倉の本家をついだものの、なにごともこの叔父と談合してとり決めてきた。叔父は殿がなされた幾つかの戦いに父と一緒に出陣してきたのである。子供の頃、叔父が囲炉裏のそばで酒で顔を真赤にし、

「見い、六」

といって太腿にひきつった茶褐色の傷痕を見せてくれたことがある。それは葦名一族と殿とが

磨上原で戦われた時に受けた弾痕で、叔父の自慢の種だった。だがその叔父もこの四、五年、めつきり弱り、時折、彼の家形にあらわれては酒を飲みながら、しきりに愚痴をこぼすようになった。愚痴をこぼしてから、傷ついた右脚をびつこの犬のようにひきずり、帰っていく。

下男たちを残し、侍は一人、家形までの坂路をのぼった。灰色の大きな空に雪片が動きまわり、母屋や納屋などの建物が黒い城塞のように浮びあがっている。馬小屋の前を通りすぎた時、藁と馬糞とのまじりあった臭いが鼻につき、主人の足音に気づいた馬が床を蹴った。母屋の戸口までくると侍はたちどまって丁寧に野良着についた雪をはらって家に入った。正面の囲炉裏端で叔父がわるい右脚を投げだして火に手をかざし、十二歳になる長男がその傍に畏まって坐っていた。

「六か」

囲炉裏の煙にむせたのか、拳を口にあてて咳きこみながら叔父は侍をよんだ。長男の勘三郎は父の姿を見ると救われたように一礼して厨のほうに逃げていった。煙は自在鉤にそって煤でよごれた天井にたちのぼっていく。父の代も彼の代もすすけたこの囲炉裏端がさまざまのことを決める談合の場所となり、村人の争いを裁くとり決めの場所となった。

「布沢に行き、石田さまにお目にかかった」

叔父はまた少し咳きこんで、

「石田さまは、黒川の土地のことだな、城中からまだ何の御返事もないと言われておった」

侍は無言のまま傍につき重ねてある囲炉裏の枯枝を折った。その鈍い音を耳にしながら、叔父のいつもながらの愚痴に耐えていた。黙っているのは、彼が何も感じず、何も考えないからではなかった。土の臭いのするその顔に感情を出すのに馴れていないからだだし、人に逆らうのが嫌いだったからでもある。だがそれよりも、いつもながら、過ぎ去った出来事にしがみついている叔父の話はやはり彼の心には重かった。

十一年前、あたらしい城郭と町とを作られ、知行割を行われた殿は、侍の家に、先祖代々住みなれた黒川の土地のかわりにこの谷戸と三つの村とを与えられた。むかしの所領地より貧しい荒地に移されたのは荒蕪地の開発という殿の御方針だったが、侍の父はその理由を自分勝手に考えていた。関白秀吉公が殿を帰順させられた時、その仕置きに不満を持った連中が、葛西、大崎の一族を中心に反乱を起したが、遠縁にあたるものでそれに加わった何人かがいた。そして自分が戦に敗れた彼らをかくまい逃がしたため、殿はそれを憶えておられて、このような荒野を黒川の土地のかわりに与えられたのかもしれない。そう父は思ったのである。

放りこんだ枯枝はこの仕打ちにたいする父や叔父の不平や不満のように囲炉裏のなかで音をたてた。厨の戸をあけ、妻のりくが酒と乾解にした朴の葉に味噌をのせて二人の前にそっとおいた。彼女は叔父の表情と無言で枯枝を折りつづける夫とを見て、今夜も何が話題になったかを感じたようである。

「なあ、りく」

と叔父は彼女をふりむいて、

「これからもな、この野谷地に住まわねばならぬ」

野谷地とは土地の言葉で見棄てられた荒野を指した。石だらけの川が流れ、わずかな稲麦のほかは蕎麦と稗と大根しかとれぬ畠。ここはその上、ほかの在所より冬の来るのが早く、寒さもきびしい。やがてこの谷戸は丘も林もふかふかと純白の雪に埋まり、人間は暗い家のなかで息をひそめ、風のすれあう音を、長い夜、耳にして春を待たねばならぬ。

「戦があればのう。戦さえあれば、功をたてて加増もあるものを」

瘦せた膝をしきりにさすりながら叔父は同じ愚痴をこぼしつづける。だが殿が戦であけてくれたおられた時代はもう終っている。西国はともかく、東国は徳川さまの勢威に服し、殿のように陸

奥一の大名でさえも勝手氣儘に兵を動かすことのできぬ時なのだ。

侍と妻とは枯枝を折り、やり場のない不満を酒と独り言とおのれの手柄話とでまぎらわす叔父の話のいつまでも聞いている。その手柄話も愚痴も、もう幾度となく耳にしたものだが、それはこの老人だけが生きするために食べている黴のはえた食物のようだった。

真夜中ちかく二人の下男に叔父を送らせた。戸をあけると、珍しく月の光にそまった雲の割れ目が出て、雪はやんでいる。叔父の姿が見えなくなるまで犬が吠えた。

谷戸では戦よりも飢饉が怖れられている。むかしここを襲った冷害をなまなましく憶えている老人たちがまだ生きていた。

その年の冬は奇妙なほど暖かく、春のような氣配が続ぎ、北西にある山がいつも霞んではずきりと見えなかったという。だが春が終り梅雨の季節が来ると雨も長く、夏が来ても朝晩は裸ではいられぬほど冷えびえとした毎日だった。畠の苗は一向に生長せず、枯れるものが多かった。

食べ物がなくなった。谷戸の村人たちは山からとった葛根や、馬の飼料である糠や藁や豆がらも食べた。それも無くなると、何よりも大事な馬を殺し、飼犬を殺し、樹皮や雑草で飢えをしのいだ。すべてを食べ尽したあと、親子も夫婦も別れ別れに食べ物を求めて村を棄てた。飢えて道に倒れる者があつても、肉親、縁者さえ世話もできずに見棄てていった。やがてその死体を野犬や鳥が食い散らした。

侍の家がここを知行地にしてからは、さすがにそんな飢饉はなかったが、父は村の家々に椽や檜の実、穂からおろしたままの稗の実を吠い入れさせ、梁の上に貯蔵するように命じた。今、侍はどんな家にも保存してあるこの吠を見るたび、一本気な叔父よりも、もっと賢かった父親の温

和しい顔を思いだす。

だが、その父さえ、

「黒川ならば、凶年が来ても凌^{しの}げるものを……」

と地味の肥えた先祖伝来の土地を懐かしんだ。あそこは手入れさえすれば、麦の豊かにとれる平野がある。だがこの野谷地では、蕎麦、稗、大根がおもな作物で、その作物も毎日食べるわけにはいかぬ。年貢を殿におさめねばならぬからである。侍の家でも大根の葉を麦や稗の飯に入れたものを口にする日があった。百姓たちは、野びる、浅つきなども食べているのである。

だが侍は父や叔父の愚痴にもかかわらず、この野谷地が嫌いではなかった。ここは父が死んでから彼が一族の総領としてはじめて治める土地だったが、彼と同じように眼がくぼみ、頬骨が突き出た百姓たちは黙々として早朝から夜がくるまで牛のように働き、喧嘩も争いもしなかった。地味のうすい田畠を耕し、自分たちの食べ物減らしても年貢は遅れずに出した。そんな百姓と話をしている時、侍は身分の違いを忘れ、自分と彼らとを結びつけているものを感じる。自分のただ一つの取柄は忍耐づよいことだと考えていたが、百姓たちは彼よりも、もっと従順で我慢づよかった。

時折、侍は長男の勘三郎をつれて家形の北方にある丘陵に登ることがあった。かつてここを支配していた地侍が築いた砦の跡が雑草に埋もれて残り、灌木にかくれた空濠^{からどろ}や枯葉をかぶった土塁からは、時折、焼米やこわれた茶碗の出ることもある。風のふく山の上からは谷戸と集落とが見おろせる。悲しいほどあわれな土地。押し潰^{つぶ}されたような村。

（ここが……わしの土地だ）

侍は心のなかでそう呟く。もう戦がないならば自分は父と同じように、生涯、ここで生きるだろう。自分が死んだあとは長男も総領として、同じ生き方をくりかえすのだろう。ここから自分

たち親子は一生、離れることはないのだ。

彼はまた、その山の麓にある小さな沼に与蔵と釣りに行くこともあった。晩秋、暗い葦の茂ったその沼に褐色の水鳥にまじって、三羽、四羽、首の長い白い鳥が羽ばたきをしているのを見ることがあった。しらどりと言われるその鳥は、寒気のきびしい遠い国から海を越えて来たのである。渡り鳥はまた春になると大きく羽を動かし谷戸の空を舞いながら去っていく。その鳥を眺めるたび侍は、彼らが自分の生涯訪れぬ国を知っているのだと、ふと思うこともあったが、羨む気はあまりなかった。

寄親である石田さまからお呼び出しがあった。話したきことがあるゆえ布沢までまかり越すように、とのことである。

石田さまのお家はその昔、殿の御先祖にたびたびはむかわれた一族だが、今は御一門衆として扱われている御大身である。

朝早く与蔵を連れて谷戸を発ち、昼近く布沢に到着した。氷雨がふり、石垣をめぐらした館の濠水に雨の輪が無数に浮んでは消えている。控えの間でしばらく休息したのち、石田さまにお目にかかった。

小肥りの石田さまは羽織を着て着座されると、黒光りのする板敷に両手をついて畏っている侍に笑顔を見せ、叔父の様子をたずねられ、

「先日もここでいろいろと愚痴をこぼしおった」

と愉快そうに笑われた。侍は恐縮して頭をさげた。父や叔父が今日まで黒川の土地に給地改を
して頂きたいと願ひ出るたびに、この方はその嘆願書を城中にまわしてくださった。だがその後、

侍はその石田さまから、こうした嘆願書が給人たちから次々と出され、御評定所に山積していることを聞いた。よほどのことがない限り、殿がその嘆願をとりあげられることはないだろう。

「老人の気持、ようわかるが」

石田さまは、笑顔をふつと顔から消されると、

「戦など、もうないぞ。内府さまは大坂を大事になされるお気持であり、殿もその御意向に従うておられる」

と少し強い声で言われた。それをわざわざ言いかせるために呼び出されたのかと侍は考えた。嘆願書をこれ以上、差し出しても無駄であることを石田さまはお教えになりたかったのであろう。あふれる水のように悲しみが胸中に拡がっていく。彼自身はあの谷戸に愛着があったが、しかし先祖たちの汗と思い出とが染みこんでいる土地を一日も忘れたわけではなかった。今、はつきりと石田さまから諦めるように言われた時、まぶたに亡父の寂しそうな顔が浮んだ。口惜しげな叔父の表情も甦^{よみがえ}った。

「難儀であろうが、老人を納得させるがよい。老人は世の移り変りが、どうしても呑みこめぬものだ」

真実、気の毒そうに石田さまはうつむいている侍に眼をやって、

「だが御評定所はお前の家だけに諦めよと申しているのではないのだ。召出衆^{めしだしやう}のなかには同じように昔の土地を戻してくれと願ひ出ている者が多く、ために御評定所の御重臣がたもいたく頭を悩ましておられる。だが一人、一人の我儘を聞き入れては定まった知行の割当てが次々と乱れる」
両手を膝におき、うつむいたまま侍は石田さまのお言葉をきいていた。

「ところで、今日よんだのは、ほかの用である」

と石田さまはこれ以上、黒川の土地の話を続けるのを避けるように不意に別の話題を口にされ

た。

「近く、公役の御指図がある。それに付き、お前に特に申し渡すことも起るかもしれぬ。このこと、忘れるな」

なぜ急にこんな話を教えてくださったのか侍にはわからなかった。やがて頭をさげて退ろうとすると石田さまは、まだ良い、と言われ江戸の盛んな模様を語ってくださいました。昨年から將軍さまの江戸城普請を諸大名が受け持ったため、殿もその一部をお引きうけなされ、このところ石田さま、亙理さま、白石さまのような御一門衆が交代で江戸にのぼっている。

「江戸では切支丹^{キリシタン}の御探索が厳しゅうなつてな。たまたまここに戻る折、その引きまわしを見た」

將軍の父である内府さまが今年、幕府直轄領に切支丹の教えを禁じられたことは侍も知っていた。そのため追放された信徒たちが禁制のない西国や東北に移住し、殿の御領内の金山などで働いていることを彼もたびたび耳にしていたのである。

石田さまが御覧になった囚人たちはいずれも紙を切って作った小旗をつけた駄馬に乗せられ、町中を大通りを通して刑場に連れていかれる途中だった。囚人たちは馬上から見物人の顔みしりと話をかわし、別に死を怖れている様子もなかった。

「南蛮伴天連^{ババレン}もそれにまじっておった。これまでに切支丹の者やバテレンに会ったことがあるか」「ごさいませぬ」

石田さまのお話をうかがっていても、侍には切支丹の囚人に何の興味も起らない。切支丹そのものにも関心がなかった。それは自分の住む雪ぶかい谷戸には関係のないことだった。谷戸の者は、江戸から逃げてきた信徒も、一生、見ずに死ぬのである。

「雨のなか、戻るのは苦勞であらう」

退出する侍を石田さまは父のように優しくいたわってください。館の外ではつめたい雨にぬれきった蓑かさをまといて与蔵が犬のように従順に侍を待っていた。彼より三つ年上のこの下男は生れた時から侍と同じ家で育ち、侍の家のために働いてきた。馬に乗りながら彼は今から戻る夜の谷戸を思いうかべる。数日前の雪が凍み雪になって闇のなかにしろじろと浮びあがり、百姓の家は死んだように静かだろう。妻のりと三、四人の者だけが起きて自分を待っている囲炉裏端。足音を聞きつけて犬が吠え、湿った藁わらの臭いのする馬小屋で、眼をさました馬が足踏みをするだろう。

湿った藁わらの臭いは宣教師の坐っている牢獄にも充滿していた。その臭気には今までここに入られていた信徒たちの体臭や尿の臭いも入りまじり、それが時折つよく鼻を刺した。

昨日から彼は自分が処刑される率と、釈放される率とを計算してきた。二つの皿に分けた砂金のいづれが重いかを調べる商人のように冷静な気持ちで考えていた。助かるとすれば、それはまだ、彼がこの国の為政者たちに役にたつためである。今日までこの国の権力者たちはマニラから使節がくるたびに宣教師を通辞として使ってきたが、実際、彼ほど日本語に巧みな宣教師はもう江戸にはいなかった。貪欲どんよくな日本人たちが、今後、マニラや太平洋の彼方のノベスバニヤ（メキシコ）と有利な貿易を続けたいならば、その交渉の橋わたしのできる自分を棄てる筈はないのだ。（主がお望みならば、死にもいたしましょう）宣教師は鷹たかのように傲然と首をあげた。（しかし、私がこの日本の教会のために必要なことをあなたはよく御存知です）

そうだ。この国の権力者と同じように主さえも自分を必要とされている。そう思うと得意の微笑がおのずと顔に浮んだ。宣教師は自分の能力に自信を持っていた。ポロロ会の江戸管区長である彼は、今日までの日本での布教の失敗は、自分の会とことごとに対立してきたペテロ会の過失によるものだといつも考えてきた。ペテロ会の司祭たちは些事にはいつも政治的なくせに、本当は政治というものを知らない。彼らは六十年も布教した揚句、長崎に施政権も裁判権も持った教会領を持ち、そのために日本の権力者たちを不安にさせ、疑惑の種をまいてしまったのである。

（私が司教なら、そんな愚かな真似はさせなかつたろう。私が日本の司教なら……）

心のなかでそう言いかけ、さすがに彼は少女のように顔を赤らめた。自分の心にまだ世俗的な野心や虚栄心が形を変えて残っているのに気づいたからである。日本での布教をすべてローマ法王庁から委任される司教になりたいというこの気持には、彼の個人的な野心もやはりふくまれていた。

セビリヤの有力な市参事会議員を父に持つ彼の一族にはパナマ諸島の総督がいた。宗教裁判所の長官もいた。祖父もまた西印度諸島の征服に従事した。そんな政治家の血を受けた自分に普通の司祭たちとちがう才能のあるのを発見したのは、日本に来てからである。それは内府や將軍の前に伺候しても、卑屈になることなく、狡猾な老中たちの心をつかむ術や説得力を持っていることでもわかつた。

口惜しいのはペテロ会の圧迫のために、自分の一族の持っているこの才能を発揮する大きな舞台がまだ与えられぬことだった。ペテロ会の会士たちが秀吉や内府をたくみに操縦することでもできず、江戸城に食いこんでいる仏教の高僧たちを懐柔さえもせず、逆にそれら要職者の反感と疑惑の種をまいたことを知っているだけに、彼は一方では自分の野心を恥じながらも司教になりたいという気持を抑えることができなかった。

（この国での布教は戦いだ。戦いでは、無能な指揮者がいれば、それだけ兵士たちの血が無駄に流れる）

だから宣教師はこの国で生きのびねばならぬと思った。彼が匿（かく）れていた間、五人の信徒が捕縛されたことを知ってはいたが、あえてその者たちと同じ運命をえらぶことを避けたのもそのためだった。

（だが、もし主が私を必要とされないなら）痺（しび）れた足をさすりながら彼は呟いた。（いつでもお召しください。私が決して自分の生命に執着していないことは、あなたが一番よく御存知です）さすっている足のそばを黒い柔らかなものが通りすぎた。牢内に巣くっている鼠である。鼠は彼が昨夜、眠っている間も、細かな音をたてながらこの狭い一角のどこかを齧（かじ）っていた。その音で眼をあげるたびに、彼はおそらくもう処刑場で殺されたにちがいない五人の信徒たちのために主禱文を小声で唱えた。唱えることで彼らを見棄てねばならなかった良心の痛みを鎮めようとした。

遠くで足音がしたので宣教師はいそいで投げだした足をなおし、居ずまいを正した。食事を持ってくる牢番にさえだらしのない恰好を見せたくはなかった。こうした牢獄のなかでも日本人から馬鹿にされるような態度をとることを自分に許さなかった。

足音が次第に近づいてくる。笑顔をみせねばならぬと考えて、鍵穴にさしこまれる鍵の音を聞きながら宣教師は頬に微笑をつくった。死の直前でも笑顔をみせようと彼は平生から思っていたのだ。

軋（し）んだ音をたてて戸がひらき、錫（すず）をとかしたような光が湿った地面に流れこんだ。眼をしばたたきながら笑顔をそちらに向けると、牢番ではなく黒い着物を着た二人の役人が覗きこんでいるのが見えた。